

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第102号(通巻第162号)
2013年6月20日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山
複合施設 301 tel&fax 042-376-4572(事務局員は常
駐しておりません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL ht

://

ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

青空の下 180余名がボートの楽しみ満喫



Eボートのオールを持ち方を練習する

多摩市水辺の楽校の今年最初のフィールド行事、「多摩川カヌー体験教室」が6月8～9日の午前と午後の計4回に分かれて、一ノ宮公園前の河畔で開催された。4年前から始まったこの教室だが、最初のころはなかなか申込者が定員に達しなかったのだが、今回は200名の募集に対して360人以上の応募があり、約160名が抽選で落ちるといふほど、楽しさが広まってきたということなのだろう。まさに「継続は力なり」。

けっきょく、当日キャンセルが20名ほどあり、実際の参加者は182名。それでも、イベントを運営する、あばれんぼキャンプのスタッフの巧みな手綱さばきで、参加した子どもたちはオールやパドルの使い方を事前に十分教わり、多摩川に漕ぎだしていく。

ボートは12～13人乗りのEボート2艇と2～3人乗りのカヌー(カヤック)10艇が用意され、それぞれ2班に分かれて乗り換えて楽しむ。なかにはEボートとカヌーが接触するシーンもよく見られた。だが、樹脂入り強化ゴム製の船体同士だから、割れたり水漏れしたりすることはない。

カヌーとEボートを乗り換える15分の休憩時間には、保護者の乗船もオーケー。少ない時間とはいえ、夫婦で来ていた保護者たちが楽しそうにカヌーを操っていた。やっぱり、川っていいですねー。

川岸にはイベントに協力するスポーツオーソリティ府中店/多摩センター店の張った大型テントの日陰で、保護者たちが太陽を避けたり憩ったりしていた。参加した子どもたちや保護者などに感想を聞いたところ、子どもたちは「ボートで向こう岸へ行き、水につかったり泳いだりしたことが楽しかった」「前は雨で途中で中止になったためEボートしか乗れなかったが、今回は



Eボートとカヌーが接触するシーンも

カヌーにもおのれてよかった」「チームワークが大切だと思った」などのほかに、「3人乗りの真ん中に座るとパドルが漕げなかった」なんて声もあった。



保護者の夫婦がカヌーの試漕

保護者からは「指導員のお兄さんたちの気配りで、子どもが楽しそうについていっていた」といった趣旨の感想が多かったが、「近くでも多摩川で遊ぶことがなかったため、こんな機会をもらってありがとう」というような感謝の声もあった。

なお、このイベントの様子は6月16日(日)～22日(土)までの1週間、多摩テレビで1日4回、各15分ずつ放映される。

多摩市水辺の楽校の始業式(楽校式)開かる

市民団体と多摩市教育委員会、多摩市環境部環境政策課の3者で構成される多摩市水辺の楽校の、今年度の始業式ともいえる楽校式が6月16日、多摩第一小学校のさくらホールで開かれた。



楽校式で挨拶する阿部市長

多摩川には源流部から東京湾に注ぐ河口までに19の水辺の楽校があるが、中流域の多摩市でこの活動が始まったのは5年前から。しかし、昨年度は今年1月に「多摩川子どもシンポジウム」を、それまでの狛江市から初めて多摩市に移動して開催。子ども90名、保護者110名の参加があり、大任を果たしたばかり。

来賓には国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所の船橋昇治所長を始め、阿部裕行多摩市長、清水哲也多摩市教育長や、第一小学校、連光寺小学校、多摩中学校など、多摩川を教育現場にしている学校の校長先生、さらに山梨県小菅村にあるNPO、多摩源流こすげからも菅井香波さんが駆けつけてくれ、楽校式を祝福。

その後は、平成24年度の活動報告と25年度の活動計画が報告され、来場者には原案通り承認された。また、多摩川子どもシンポジウムのダイジェスト版のDVDも上映され、1月小菅村のNPOの菅井さんの思い出をふたたびよみがえらせていた。なお、この日の午後に予定されていた「川の生き物観察会」は、朝の天気予報で天候の悪化が予想されたために中止となった。

今年も大人だけの「ヤゴ救出作戦」

今年もやりました、瓜生小学校の「ヤゴ救出作戦」。6月10日、瓜生小のプールサイドには9名の大人たちが集まった。常連のボランティアだけでなく、学校からの通知でこの日の作業のこをを知り、参加してくれた保護者もいる。

プール内に残っていた水は若干多め。それでも胴長を身につけ、網を持った一行は作業開始。今年のヤゴは例年より大きめに育っており、種類はほとんどがアキアカネだったが、





ヤゴを網ですくって集める

なかには個体の大きなシオカラトンボも何匹も見られた。

途中で雨が降り出し、一時中断したものの、小やみになったあとに続行。けっきょく1000匹以上のヤゴをす

くい上げ、学校の希望する生徒は家に持ち帰り、あとは教室のなかで飼育することになった。一部は前任者の先生が異動した小学校にも届けられた。

なお、今年も昨年が続いて市販の家庭用放射線測定器を使い、プールサイドの空間放射線量を測定した。その結果、測定した8カ所中、線量が上がっていたところが3カ所。下がっていたところが4カ所あったが、いずれも0.01から0.03マイクロシーベルト/時ほどの微小なものだった。参考までにデータを記すとつぎのようになる。(単位は $\mu\text{Sv/h}$)

プールサイド南西 0.11(昨年 0.08)、北西 0.05 以下(同 0.06)、藤棚の下 0.08(同 0.05)、北 0.06(同 0.06)、北東(小プール)0.11(同 0.08)、東 0.07(同 0.09)、南東 0.10(同 0.13)、南 0.09(同 0.10)

東京都立産業技術研究センター見学記



設置されたモニタリングポスト

この都産技研は地方独立行政法人といって、国の独立行政法人とは違う東京「地方」が対象の法人。予算は全額東京都から出ている。都内に本部と3カ所の支所、多摩テクノプラザ(昭島市)の5つの施設からなっている。

本部は江東区青海のテレコムセンター駅の駅前にあり、今回ここを見学することができた。

どんなことをやっているかという、都内中小企業のための技術相談、依頼試験、中小企業と提携した研究開発、技術課題の解決、技術セミナーの開催、情報発信、専門コーディネーターによる産学公連携支援など。

だが、都民に直結した別の面の研究も行っている。それが環境放射能関係の測定、検査、分析などだ。最初は1974年の米原潜の横須賀寄港による東京湾の汚染対策を調べたこと。それ以来、86年のチェルノブイリ原発事故時の放射能レベル観測と都民への情報提供、99年の東海村JCO事故時における放射能レベルの情報提供、2006年と08年の北朝鮮地下核実験にともなう放射能レベルの観測、そして11年3月の福島第一原子力発電所の事故——と、もう40年以上の観測歴があるのだ。



大容量エアースンプラー

ここでまず見せてもらったのが、空間線量率測定に用いられるモニタリングポスト。よく「モニタリングポストの値に異常は見られなかった」とか聞くあれだ。屋外に設置された円筒形のものに穴がいくつもあいている。そこで

得られたデータが屋内のモニターにつながっており、24時間、異常が検知されていないか監視している。

福島の3.11後、3月15日午前10時53分に0.59マイクロシーベルト/時と急上昇が観測され、同日の19時台に0.22、16日4時台に0.18と下がり、その後0.06~0.08台が続いていたが、3月21日以後、降雨によって浮遊塵に含まれていた放射性物質が雨とともに地上にたまり、3月23日の2時台には0.17(各 $\mu\text{Sv/h}$)とまた高まったことなどが観測されている。

もう一つは屋外の道路沿いに設置された大容量エアースンプラー。これも常時、大量の空気を吸い込み、浮遊塵のなかに含まれる放射性物質を、特殊なガラス繊維ろ紙を使って捕集するというもの。真黒になったろ紙をゲルマニウム半導体検出器で測定して、放射性物質の種類と空気1立方mあたりの放射能の量(ベクレル)を調べる。

これとは別に、事務所内の測定ではおもしろかったのは、御影石とかカメラのレンズ、コンブ(カリウム)などから発する放射線量が高いこと。御影石はお墓に多いことから、墓地はかくれホットスポットともいえるのだ。

最後に日本分析センターの資料によると、日本人の自然界から受ける放射線による1年間の被ばく線量は約2.15ミリシーベルト(mSv)であり、政府が定めた年間被ばく量1mSvの2倍以上を受けている現実がある。

このうち内部線量は、食物からが0.97、吸入により(主に空中のラドン)が0.49、外部線量は宇宙からが0.32、大地からが0.37(各mSv)で、合計が2.15となる。だから放射線量にあまり神経質になることはないともいえるが、これから育っていく子どもたちには食品などでしっかり注意を払う必要がある、とのことだ。

ついでに医療関係の診断被ばくの推定線量は、一般X線検査(0.1~7.4)、X線CT検査(2.4~12)、核医学検査(4.5~19)、歯科X線検査(0.2~1.3=mSv)と、いくら短時間とはいえこれほど高い。(井上寿一記)

当会議の総会開催、6議案成立

多摩市民環境会議の平成25年度総会が6月15日、パルテノン多摩の第一会議室で開かれた。出席者の人数と委任状で総会は成立。第1号議案(平成24年度活動実績報告)から第6号議案(多摩循環型エネルギー協会への団体加盟について)までが審議され、それぞれの議案が賛成多数で成立した。なお、多摩エネルギー協会の加盟資格は賛助会員。



左が使用前、右が後のろ紙



測定ポストの室内モニター



案内役を担当してくれた櫻井昇氏



総会風景